

---

# しろいさかな

からたちみかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しろいさかな

### 【NZコード】

N1347D

### 【作者名】

からたちみかん

### 【あらすじ】

金木犀の香と、大好きだった部長。気がつけばあたしはすすき野原に立っていた。

金木犀の香りが漂つていてる。

見上げれば上弦の月。夕暮れ時の雑踏は慌しく人々が行き交つて  
いる。私は街路樹として植えてある金木犀の木の下にいた。

金木犀の元に設置された木製の椅子に私の大好きな部長が腰かけ  
ていた。会社の上司で私は誰よりも部長を尊敬していた。

大好きだつた。

部長は感情を押し殺すように俯いていた。

よれよれになつたスーツ。疲れきつた表情と部長らしくもない無  
精髪。歳相応かそれ以上に見える。

普段は『若いヤツらには負けない』と、外見も行動も氣を使って  
いる部長がこんな格好をさらすなど、考えられなかつた。

部長は虚ろな表情で顔を上げた。私を通り越して部長が見上げて  
いたのは上弦の月。

不意に部長は金木犀の幹に軽く頭を打ちつけはじめた。その度に  
金木犀の黄色い小さな花がハラハラと落ちて部長の髪にくつつく。  
部長はそれすら気づいていない。

「髪の毛に金木犀がついていますよ」

笑いながら私は部長の髪についた金木犀の花を払おうとした。私の手を部長は避ける。

見上げる漆黒の瞳。

悲しみに満ちた眼差し。

「ごめんなさい」

バツが悪くなつて行き場を失くした私の手が宙を彷徨う。突然、  
部長は立ち上がり歩き出した。

「待つてください」

私は部長の背中を追いかけた。早歩きでついていくのがやつとだ  
つた。私は必死になつて追いかけたのに。

どうしても追いつくことが出来なかつた。

風の吹く場所にいた。すすき野原が広がつてゐる。私はたつた独りでその場所に立つてゐた。西に傾きかけた空。黄昏の色。赤い夕焼けの中で青く水のようにピンと張つた空氣。夕焼けに染まつた橙色の雲。

私はこの場所を知つてゐる。

その雲の中に一際白い雲の群れが真ん中に渦を作つてゐた。不思議に思つてよく見ればそれは雲ではなかつた。

しろいさかなかつた。

白く半透明な魚たちが空へ昇つてゆく。  
琥珀色の光に向かつて。

螺旋を描き。

「しろいさかな」

私は呟く。

「ああ、そうか」

私はぼんやりと想う。

部長は憧れの人だつた。

あれは去年のことか。部長とふたりで残業してゐた時、勢いで言つてしまつた。

「私、部長のこと好きです」

まるで告白のような一言。

「おいおい、大人をからかうんじゃないよ  
照れたように部長は笑つてゐる。

「お父さんみたいで」

付足すと部長は苦笑いした。

「お父さんねえ。俺、そんなに君のお父さんによつてゐるの?」

「会ったことないからわからないです。部長みたいなお父さんがないな、て。憧れです！」

「憧れねえ……」

「はい」

私は満面の笑みで頷いた。部長は小さく「そうか」と、答えた。どうやら部長は何となく事情を察してくれたらしい。離婚か死別か。多分どちらかだと思つていてるのだろう。

「さ、終電前に仕事終わらせて帰るぞ」

「はーい」

部長はさりげなく話をそらした。私も父親がいない理由を深く言いつつもりはなかった。曖昧にして話を終わらせればそれですむハズ、だつた。

終電に間に合ひ仕事を片づけたその晩の帰り道。駅まで部長とふたりで肩を並べて歩く。会社から駅までは徒歩で十分程度だ。暗い夜道。すっかり冷え込んだ街は金木犀の香で満たされていた。

「金木犀の香りすごいですね」

私は秋の深まりを感じて何だか嬉しかった。季節の中で秋が一番好きだった。

「トイレの匂いだな」

「そんな口マンもへつたくれもないこと言わないでくださいよ。もうう」

「俺らの世代は芳香剤といえば金木犀だったからな。そのイメージが強くて、な」

「部長の世代はと、ね。今は金木犀の芳香剤なんてないですよ」

「だよな」

私の嫌味に部長は乾いた笑いを浮かべる。

「私は金木犀の香、好きですよ。子供の頃、住んでいた家に金木犀の木があつて。今でもこの時期になる見に行きます。今は誰も住んでいませんで廃墟と化していますけどね」

「へえ」

母とふたりで過ごした子供の頃。懐かしくて切ない思い出は金木犀の香によつて蘇る。

「物心ついたときから父親はいませんでした。死んでいるのか生きているのかわかりません。母に聞くのがこわかつた」

どうして私は部長にこんな話をしているのだろう。部長は歩きながら話をしている私を見下ろしていた。どこか悲しそうで、それなのに優しい眼差。決して同情をしている色ではない。部長は私の話に耳を傾けている。

「お父さんが欲しくてたまらなかつた。子供の頃、もしもお父さんがいたら。いつも想像していました。学校の先生や、テレビの特撮のヒーロー。アニメの主人公。

こんな人たちがお父さんだつたらいいのに、て。おかしいですよね。お父さんいないのに。私ファザコンみたいです」

私は微笑んで部長を見上げた。つもりだつた。目頭が熱い。気を抜けば涙がこぼれ落ちそつになつっていた。そんな姿を部長には見せたくない。私は必死に涙を堪えた。氣を取ら立ち止まる。私は泣くまいと必死だつた。

影に気づいて見上げると部長が目の前に立つていて。部長の背後に見えた下弦の月がぼやけている。月だけじゃない。部長の顔もぼやけて見えた。部長は何も言わずに私の頭を撫でた。とたんに涙が溢れ出す。

「泣きたい時は泣いていいんだぞ」

そこにいたのは部長ではなく、確かに『お父さん』だつた。憧れてやまない父親だつた。あたたかくて大きな手。私が望んだもの。

「はい……」

私は何度も頷いた。

私は幼子のように泣き続けた。

誰もいない古い廃屋。夕暮れの景色の中。金木犀の香りが色濃い。部長は金木犀の前に立ち尽くしていた。私は部長の背中をじっと見つめている。

そうだ、ここは。

私が子供の頃、母とふたりで暮らした長屋だった。

部長は金木犀を見つめていた。

どうしてここに?

覚えてくれていたのだ。

あの時のこと。

私は嬉しかった。

部長がこの場所に来てくれたことが。

部長は泣いていた。ボロボロに泣いていた。声を押し殺して泣いていた。こんな姿をはじめて見た。

泣いている理由を私は知っている。

計りずとも部長は私のために泣いている。

そう思うと胸が痛む。

「ありがとうございます」

聞こえないのに。

見えないのに。

言つて私は部長に頭を下げた。感謝の気持ちでいっぱいだった。

私はすすき野原に立っていた。風が吹くすすき野原でしりにさかなを見上げていた。

それにも。

私は私を苦笑した。

最後の最後だといふのに。行きたかったところが部長の所だったのか、と、驚いていた。実の母でもなく、恋人でもなく、友達でもなく。父親代わりに憧れた部長の所だった。

「どんだけ～」

流行の言葉を口にして私は呆れて笑った。

「死んでもお父さん。か」

どうして死んだのかよく覚えていない。こんなに若くして死んだのだから交通事故だろうか？私は他人事のように思つた。

私は生前からこんなに能天氣だったのだろうか？ そうだったような気がすればそうでもないような。死んでしまうと執着心がなくなってしまうのだろうか？ 仕方がないとあきらめて。

不思議と悲しいとか悔しいとか。思つていなかつた。思い残すことはたくさんあつたけれど、清々しいような気がした。

私はしろいさかなを見上げる。

気がつけば私は、しろいさかなになつて空へ、琥珀色の光へ向かつて昇つて逝く。

「今度生まれ変わる時はお父さんがいるウチの子供がいいな。お父さんに甘えてみたいな」

そつと眩いで私は眩い光に包まれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1347d/>

---

しろいさかな

2010年10月8日15時08分発行